環境制御システムのセンサー。 右/セン サーが測った数値やデータを、農場内の







トマト。 中/本社の 横にある、研究開 発農場。下/働い ている社員たちは20 30代と皆若い。



休日は子どもたちと遊ぶのが

る浅井さん。休みの日は子どもたちと公園 で遊んだり、ザリガニ釣りをすることが何よ りの楽しみであり、リフレッシュ法だそう。

探求して、新たな価値を創造する。は、つまらない。植物の可能性を「ただ農作物を作るだけの農業で

1980年生まれ。甲南大学理学部卒業後、 東京で経営コンサルティング会社、環境ベ ンチャー企業で5年半サラリーマンとして勤務 したのち、2007年に浅井農園で就農。5代 目を継ぐ。農業経営のかたわら、三重大学 大学院で学び、2016年に博士号を取得。 所在地/三重県津市高野尾町4951 http://www.asainursery.com/

浅井雄一郎さん

その栽培管理に役立っているの培管理を活用していったのです。 林一成教授のもと、トマトのゲノ さの確保と収穫量増加を目指すこ 独自に配合した養液を点滴で苗に 度を高める方法でした。ただ、 数値をパソコンで管理、 濃度、Hをシステムで常時測定し、 が、オランダの複合環境制御シス れではおいしくても収穫量が少な ム育種研究に取り組みました。そ そこで生産性を高めるため、 培地の水分や温度、 おいしく多収量のトマトの ション学研究科に入学。 数値を蓄積することで、 三重大学大学院地域イ に自ら足を運び、 ルなど、おいしいトマトがある国 化に積極的に取り組んでいます。 とともに生産を委託する体制を築 培する地元企業に技術を提供する れています。そして、 究開発分野での人材育成に力を入 オランダ、スペイン、イスラエ 小売業への進出など経営の多角。また、新たな流通経路の開拓 地元の雇用にも貢献してい

株式会社浅井農園/三重県

トマト嫌いでも 食べたくなるトマト

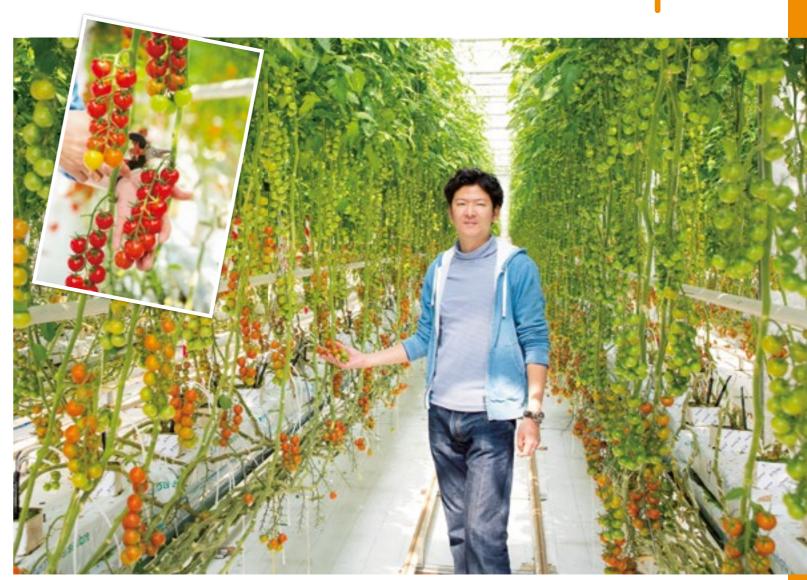
創業110周年の農家の5代目が目指すのは、現場を科学する「研究開発型の農業カンパニー」。 独自の品種と栽培管理技術で、世界一おいしく生産性の高いトマト作りに挑戦しています!

取材・文/岸田直子 撮影/原田圭介

試食してもらったところ、そして、地元スーパーの

試験栽培を始めたの

定。そこから本格的なミニトマトならうちで全部買う」と販路が決



研究開発農場の浅井さん用栽培コーナーにて。世界各国約40種類以上のトマトを栽培し、品種評価している。

っていたため、「トマト嫌いでもを受け、実家の植木業が苦しくな転機でした。当時、不況のあおり

えるトマトに出合ったのが大きな

んでいく中で、「おいしい」と思

験したのち就農し、農業技術を学

サラリ

ーマン生活を5年半経

に切り替えて今に至っています」 らミニトマトの生産を始め、 僕が就農した翌年の 20 や花苗を生産していたんです

実はトマトが苦手だった浅井さ

する新たな農業ビジネスに取り組

もったのをきっかけに、農業の

日本の家族農業経営に疑問を

んでいます。

三重県津市で創業

注目を集めています

浅井雄一郎さん

次世代型の農業

トマト嫌いでも好きになる